四〇
五九

ロスアンジェルス正餐(さん)会における
マッカーサーの演説ーニューヨーク・タイムズ より 第四十から第五十九まで
(一九五五年一月二十七日付)

114

ロスアンジェルス正餐(さん)会における
マッカーサーの演説ーニューヨーク・タイムズ より 第四十から第五十九まで
(一九五五年一月二十七日付)

国立公文書館
分類
排架番号 2 A 38-8 憲 114

国立公文書館
National Archives of Japan

ロスアンジエルス正餐（さん）会における
マツカーサーの演説――ニューヨーク・タイムズ
（一九五五年一月二十七日付）

国立公文書館
National Archives of Japan

ロスアンジェルス一月二十六日（ＡＰ発）。

以下は、マッカーサー公園内の銅像献呈の際にアメリカ在郷軍人会（American Legion）ロスアンジェルス郡評議会主催の市民正餐（さん）会においてダグラス・マッカーサー陸軍元帥が行つた演説の、予め準備されたテキストである。

5702

国立公文書館
National Archives of Japan

5703

閣下、ブフアツフ判事、ゴーショー司令官および今夜この注目すべき会合にご出席の皆様

本日、この著名な都市ロスアンジエルスがわたくしにお与えくださつたほどの栄誉を生存中に与えられた人は、歴史上にほとんどないのであります。皆様は、わたくしの心に、愛国的情熱と臣民的熱情との忘れ得ぬ感銘を深くきざみこんでくださいました。皆様は、わたくしの心に、消すことのできない感謝の念を― 言いあらわすべき適当なことばも見当らないほどの感謝の念を、呼び起してくださいました。けれども、それにもかかわらず、人生の現実をみつめると、ものごとを正当に評価する見透しを持つことが可能となります。すなわち皆様のご行動が、一個の人間を記念したいというご希望に発するよりは、むしろ、はるか昔からいわゆるアメリカ的生活様式の縦横の糸に織りこまれてきたもろもろの理想に対する国民の愛着を宣言したいという

国立公文書館
National Archives of Japan

お気持に、いつそう多く発するものであることを理解することが可能となります。もろもろの根本原理のこの豊かな伝統を象徴するものとしてわたくしをお選びくださいましたことは、一つの名誉でありまして、この名誉は、わたくしがそれに値しない者であるにもかかわらず、わたくしを非常に偉大な人間のように感じさせ、まことに恐縮にたえないところであります。ここに名をあげない幾百万の人々の信仰と勇気とが、われわれの国の真の偉大さを生んだ不死の道を築いたのでありますが、わたくしの名が、この人々の総代として記されるということは、ありとあらゆる誇りをこえて、わたくしの胸に非常に謙虚な心を生じさせます。そのこと自体、わたくしをして、自分の軍功を示す肩の星のいずれにも増して、国の名誉を象徴する国旗の星をはるかに多く敬う気持にさせるものであります。

誕生日の祝辞をくださいましたすべての方方に、わたくしは心から感謝申しあげます。

5704

このような好意のおことばは、わたくしの母、あのやさしいヴァージニアの婦人の二つの目を、きょう、この彼女の日に、喜びに輝かせたに違いないことを、わたくしは存じております。ありがとう！母の名においてい、くりかえしくりかえし、ありがとうを申しあげます！そして「老兵は決して死なない」のでありますから、わたくしは、さながら永久に生き続けるつもりでいるかのように生き続けることをお誓い申しましょう。かの有名な兵営の歌は、明らかに、戦場の殺戮（りく）を免かれて青春の泉を発見したわれわれ老兵たちのことを言っているのです。そしてまた、もし、われわれが真に詩人の言うことを理解さえしたならば、まつたくのところ、青春とは、もつぱら人生の一時期を指すのではなくて、精神の一状態を指すのだということを、よく理解することができたことでありましょう、、、、。

青春とは、単に成熟した頬（ほお）とか、赤い唇（くちびる）とか、

2501

国立公文書館
National Archives of Japan

しなやかな（ひざ）とかにばかり関係のあるものではないのです。それは、意志の気質であり、想像力の資質であり、感動の力強さであり深い人生の泉の新鮮さであります。それは、気質的にみて、引つこみ思案より勇気がまさり、安易な心より冒険に対するあこがれがまさつていることを意味するのです。人は、単に年令を重ねることのみによつては、年をとりは致しません。ただ理想を捨てることによつてのみ年をとるのであります。年令が皮膚に、しわをよらせることはありましょう。しかし、事物に対する興味の喪失は、魂に、しわをよらせるのです。心配、疑念、自信の喪失、恐怖および絶望―これらのものこそ、腰をまげさせ、のびゆく精神を引きとめて塵・芥（ちり・あくた）に変えてしまうあの長い長い年略（としじ）に当るものなのです。年令が何歳であろうとも、生きとし生ける者の胸には常に、驚きを好む心や、事件に対して臆することなく挑戦する心や、次には何が来るかと期待する子供のようなあこがれや、人生の歓喜や遊戯やが住んでいま

す。人は、自分の信仰に比例して若く、不信仰に比例して年をとつている。自信に比例して若く、不安に比例して年をとつている。希望に比例して若く失望に比例して年をとつている。あらゆる人の胸の中枢部には、ものを記録にとどめる部屋（へや）があります。それが、美や希望や元気や勇気のメッセージを受けつけているかぎり、人はいつまでも若いのです。心の琴線がすべてゆるみ、人の胸が厭世の雪と皮肉の氷にとざされたとき、そしてそのときのみ、人は年をとつたことになる―そしてそのときこそ、詩がうたつているように、消え去つてゆくのです。

（戦争の歴史をたどる）

本日のこの豪華な聴衆の中の数多くの方々は、すぎし日のわが戦友でありました。その人々は、戦争のもつあらゆる恐怖を味わい、戦争の経験者として、戦争が再発しないことを祈つているのです。いかにして、戦争などという制度が、かくも密接に人間の生活と人間の文明

国立公文書館
National Archives of Japan

とにかかわり合うこととなつてしまつたのであるか？とわれわれは自問します。いかにして戦争は、われわれの生存における最も重大な要素にまで成長してしまつたのであるか？戦争は、当初においては、相争う氏族間の争いを解決する一種の剣闘的方法として、非常に小規模に行われました。最も古く最も古典的な例の一つとしては、ダビデとゴリアテについての聖書の物語があります。相争う双方のグループがそれぞれ選手を選びました。選手らは戦い、その勝敗の結果を基礎として協定が生れました。ついで時が移ると、軍隊という小人数の専門家のグループが、個人選手に代りました。これらのグループは、世界の目立たない片隅で戦い、その勝利または敗北は、それに続く平和の基礎となつたのでした。その当時以来、ずつと引き続き、軍隊の性能と偉力は常に加速度的に増大して来たことが絶えず記録されております。軍隊は、初めは民衆の数パーセントという低い率の人々を含むだけであつたのが、ついには、すべての人を巻き込むに至つたのであります。いまや国全体が武装しております。

わたくし自身の生涯の期間だけをとつてみましても、わたくしは、このような進展ぶりを、まのあたり見て参りました。今世紀の初め、わたくしが陸軍に参加しましたときには、目標は、ライフル銃なり銃剣なり刀剣なりで一人の敵をたおすことでありました。ついで一時に十数人もの兵を殺すように考案された機関銃が出現しました。その後幾百の人の上に死を降らせる重砲が出現しました。ついで幾千の人を殺す航空機の爆弾が出現しました。そこには、数十万の人々に影響の及ぶ原子爆弾が、さらに加わつたのです。現在は、電子工学やその他の科学的方法によつて、破壊可能力は、数百万人を包含するところまで高められました。しかもわれわれは、休むことのない手をもつて暗い実験室で熱病的な研究を続け、いつさいを一撃のもとに破壊しつくす手段をみつけようとしているのです。

5706

国立公文書館
National Archives of Japan

しかし、まさにこの科学による壊滅の勝利こそが―まさに発明の成功そのものこそが―戦争が国際紛争を解決する実用的手段であり得ることの可能性を破壊しつくしたのです。勢力の迫中する敵味方の双方に巨大な破壊が及ぶのでありますから、勝者といえども、戦争からは、自身の破滅以外の何ものも得ることができないのであります。

（戦争の重荷についてのべる）

第二次大戦においては今ではもう古くなつた兵器が用いられたにもかかわらず、この大戦は、勝者というものは、まさに敵に課したその傷害の大部分に自分自身が耐えてゆくほかないものであることを明白に実証しました。わが国は、幾十億ドルのお金と無限のエネルギーとをドイツならびに日本の傷手（いたで）をいやすために費しました。戦争は、敵味方双方を破壊するフランケンシュタインとはなつたのであります。戦争は、もはや国際的権力と富力とに達する近道―日の当る場所に出る近道―を堂中のものとする冒険のための武器ではなくな

つているのです。負ければ絶滅します。勝てば負けるために勝ち残つたようなものです。戦争には、かつての決闘の勝者の好運は、もはや存在しません。―むしろそこには、両者を心中に迫いやる危険がひそんでいるのであります。科学は、戦争をかつこうの仲裁者としては流行遅れのものに変えてしまいました。ここで大問題は、「かかる事実は、戦争を、いまや、この世から締め出すことができるようになつたことを意味するのか？」ということであります。もしそうであるならそれは山上の垂訓以来の文明における最大進歩を記録することになりましょう。それは人類をその当初からおおい尽していた最も暗い影を一気に払うこととなりましょう。それは恐怖を去り安全をもたらすばかりでなく―また新しい道徳的精神的価値を創出するばかりでなく―世界の生活水準を、人間がいまだかつて夢見たことさえないほどの高さにまで高めるような経済的繁栄の波を産み出すこととなりましょう

現在各国が相互に戦争準備費として費消している幾千億ドルのお金は

5707

国立公文書館
National Archives of Japan

おそらく地球上から貧乏を追放してしまうに足るものでありましょうそればかりではなく、それ以上のこともできるでありましょう。それは、現在では乗り切ることができないように見える国際間の諸緊張を一気に和らげ、もつと解決の道のありそうな事情のものに変えることができましょう。例をあげると、ドイツの再軍備、予防戦争、強国による衛星国の支配、世界軍制度、不合理な課税制度、産業に対する原子力利用、物資や人間のもつと自由な交換、外国援助ーそして、まつたくのところ、軍隊の使用を必要とするありとあらゆる問題をめぐる複雑な諸問題がそれであります。それはまた、力強い政治的諸効果をも、もたらすことでありましょう。それは、はかり知れぬほど各国政府の首領たちの力をそぎ、それによつて全体主義的または独裁主義的支配の生じるのを不確実ならしめる効果がありましょう。個人が大衆に対して行う統制が増大しつつあり、これは危険なものでありますが、このような統制ーならびにそこから生ずる社会主義的および家父

長的傾向ーは、大方が、戦争を引き起すか平和を存続させるかについてのその個人の影響力によつて発生するのであります。この脅威を取り去るならば、国の首長は、もつと本来的な、国民の監視のもとにある地位となるでありましょう。

（戦争禁止を可能とみる）

人はすぐ、戦争の廃止は、幾世紀にもわたる人類の夢ではあつたがこれを目的とする提案は、いずれも不可能または空想的であるとされて、たちまちのうちに捨て去られてきたのだというでありましょう。世のあらゆる皮肉屋、あらゆる厭世家、あらゆる山師、あらゆるほら吹きが、常に戦争廃止の可能性を否認してきました。しかしこれは過去の十年間に科学が大量殺人を現実のものとする以前のことでした。その当時は、人間性はまだ純粋の理想主義が通用するほどの神学的な発展段階には到達していないのだという議論が行われていました。過去二千年間、芸術や科学の変り方に比べて人間性の変化の速度は、

5708

国立公文書館
National Archives of Japan

嘆かわしいほど、おそかつたのであります。しかし、いまや核兵器その他の破壊力の戦慄（ゆつ）すべき当面の発展により、この問題は、主として道徳の問題、精神の問題であるとみるわけにはゆかなくなりそこから引き離されて科学的な現実と同列に置かれるに至つたのであります。それは、もはや学識ある哲学者や僧侶のみが熟考すべき性質の倫理的方程式ではなく、自分が生きるか死ぬかが問題となつている大衆自身の世論が決定すべき困難な核心的問題となつたのであります。これは、ソヴイエト側の世界からいつても真実でありますし、自由諸国側の世界からいつても真実でありますー鉄のカーテンのかなたでも真実であり、鉄のカーテンのこなたでも真実なのであります。世界中の一般大衆は、自由人であろうと奴隷であろうと、この問題の解決については意見の一致をみております。そして、これだけが世界中でただ一つ、一般大衆の意見が必ず一致する問題であるかもわかりません。しかし、これは、あらゆる問題の中で最も重大な、そして最も決定的

な問題なのです。

指導者というものは、のろまなものです。権力という病が、かれらを混乱させ正体なくさせているものとみえます。かれらは、基本的問題にさえ、まだ手をつけてもいません。まして、この大衆の要求を実現する具体的方策を作り出すことは、なおのこと、していないのです。かれらは百の論争点をめぐつて議論を行い、あじり立てるーかれらは、戦争の脅威から必ず生じるところの誤解をよいことにして、あるいはわれわれを絶望の淵（ふち）に追いやり、またあるいはわれわれの希望をユートピアの高さにまで棚上げしようとしますーしかし世界のどの首脳部の役所においても、また国際連合の諸会議場においても真の問題たるべきものは、いまだ提起されていないのであります。かれらは、文明の進化におけるこの次の一大進歩は、戦争が廃止されないかぎり生じ得ないのだというありのままの真実を、あえて表明しようとは決してしないのであります。この簡単な真実をかれらに納得させる

国立公文書館
National Archives of Japan

には、もう一度大破壊という大変動を必要とするのかもわかりません。けれども、どんなに奇妙に思えようとも、一般人ならば今ではすべての人がこのことを知つているのです。これは、両陣営の意見が一致をみることのできる問題であります。なぜなら、これによつて両陣営が同等に利益を受けるからであります。この問題は、両陣営の利害が完全に一致する問題、しかも決定的なただ一つの問題なのであります。この問題は、もし解決したならば、それによつて他のいつさいの争いが解決するかもしれないたぐいのものなのであります。

（利益問題）

近代的な国家の間の協定は、通例、双方の国家がその協定のおかげで利益をあげている間だけしか有効な協定として尊重されていないということは、時が示してきたところであります。しかしながら、双方の側にまちがいなく利益があれば、双方がいずれも信頼できる相手となります。そうなると、これはもはや相互間の誠実に基礎を置く問題

ではなくなつてくるのです。いまや、相手方を信じられないから戦争をするという議論ーひとりの無頼漢が多数の善人を破壊し去るかもしれないという議論ーは、真実はたとえその通りであるとしても、もはや説得力を持たないのであります。問題は、もはや信頼に依存する事柄ではなくなつているといえましょうー戦争を違法のものとして追放することが、自国の利益になるというだけで、各国は約束を守るでありましょう。そして、自己の利益ということほど有力で強力な影響を与え得るものは、ほかにないのです。各国の軍備の国際的点検は必ずしも必要ではありますまいー世界のあらゆる地域における世論が、結果を確実ならしめる大きな尺度の役を果すでありましょうーそして各国はいずれもこのことから非常に多くの利益を得ることが明らかなので、結局においては、大勢に従わざるを得ないことでありましょう。このことは、もちろん、すべての軍隊の武装解除を意味しはしないでしょうが、しかし単隊をもつと単純な国際秩序の問題や国際警察の問

国立公文書館
National Archives of Japan

題を担当するものにまで縮少することではありましょう。このことは、一朝にしてユートピアが生じることを意味しはしないでしょうが、しかし、現在、人類の発展途上に存在している大きな障害物が取り除かれることを意味するものではありましょう。

現在における、国民絶滅の脅威を伴つた緊張は、二つの大きな錯覚のゆえに存在し続けているのです。第一の錯覚は、ソヴイエト側において、資本主義諸国がかれらを攻撃する準備を進めていると完全に信じ切つていることであります。おそかれ早かれ、われわれが打つて出ようとしていると完全に信じ切つていることであります。第二の錯覚は、資本主義諸国の側で、ソヴイエトがわれわれを攻撃する準備を進めていると完全に信じ切つていることであります。おそかれ早かれ、かれらは打つて出ようとしていると完全に信じ切つていることであります。双方ともまちがつています。双方とも、国民大衆に関する限り等しく平和を望んでいるのです。双方のいずれの側にとつても相手方

との戦争は、破滅以外の何ものをも意味しはしないでありましょう。双方とも等しくそれを恐れているのです。しかし軍備の絶えざる加速度的強化は、格別その意図もないのに、ついには自然の一大爆発を産んでしまう場合も大いにあり得るのです。

世界中のすべての物知りの徒、すべての皮肉屋、すべての偽善家、すべての有給の洗脳者、すべての利己主義者、すべての事件屋、その他さまざまの性格の人間が、冷笑と嘲笑とをもつて、そんなことは夢でしかあり得ない一夢想家の漠（ばく）とした空想でしかあり得ないのだ、というでありましょう。しかし、デイヴイッド・ロイド・ジョージが第一次大戦の危局に当り、英国の衆議院でのべたように「われわれは前進し続けねばなりません。さもなければ滅びてしまうのです」。そして、世界の指導者たちについて、われわれがなし得る一大批判は、われわれが「前進し続けること」を可能ならしめるであろうところの計画が、かれらに欠けていることなのであります。かれらのすべての

5711
国立公文書館
National Archives of Japan

提案は、真の問題点の周囲をめぐつているだけであつて、あえて真の問題点そのものに立ち向おうとするものではないのであります。かれらは、互に連合し合うことにより、世界中に資金をばらまくことにより、新しいそしていつそう恐ろしい武器を発達させる熱病的活動をすることにより、そして、平和時に徴兵を行うことによつて、軍備をいつそう充実拡大しているのです―しかも、これらのすべてに対し、将来の仮想敵が、たちどころに競争相手となつて、せり合うのです。われわれは、戦争になつた場合には軍備が勝利の機会を増すのだと聞かされております。―これは、相手方が当方と同じ比率で軍備を拡充することさえしなければ、議論の餘地のないことでありましょう。しかしほんとうは、両陣営の軍備の比率が年を経ても僅かしか変らないというのが真相なのです。一方の陣営の行為は、即座にもう一つの陣営の対抗行為を招くのです。

〔目的を探る〕

われわれは、際限もなく現在のような状態を続けねばならないのだと聞かされていますー人によつては、五十年あるいはそれ以上にわたつて、そうしなければならないのだと言います。その最後には何が待つているのか？何びとも、それについては申しておりませんーすなわち、そこには、なんの確定した目標もないのです。この問題は、ただ最終的な解決を求めてあとに続いてくる人々に受け継がれるだけなのです。かくて、最後になつてみても、そのときの問題点は、現在われわれが直面している問題点と寸分違わないものであることでありましょう。われわれは幾世代にもわたつて、加速度的に拡大されてゆく軍備という、目的の発表も聞かされぬ殺人的刑罰のもとに、または、さもなければ、自殺的戦争のもとに、生き続けねばならないのでありましょうか。

そしてその間、軍備の制限とか、核兵器の使用制限とか、ニユルンベルクで提案されたような新しい法規範の採用とかのような、従属的

5712

国立公文書館
National Archives of Japan

な題目や、ばく然とした題目を、もてあそんでいなければならないのでありましょうか。これらは、いずれも姑息な手段にすぎず、また、いずれも過去において種々の形で試みられ、取るに足りない結果しか得られなかつたものばかりであります。危険な諸理論も出現します。

―現実に敗北の結果を産むおそれのある諸理論であります。制限戦争論とか、敵の避難所の不可侵論とか、捕虜になつた味方の戦闘員の保護をしない論とか、国家の転覆や妨害を企む機関の存在を認める論とか、戦場の勝利に代るものを認める論とか、戦場の勝利に代るものを認める論とか―これらいつさいの理論が、平和の名において出現するのです。まことに平和は、自国の自由の諸原則を放棄する覚悟さえあれば、どこの国によつても少なくとも暫定的には得られるものなのであります。しかし代償いかんを問わない平和―外国の圧迫に対する譲歩政策を伴う平和―次の諸世代にひどい結末を追つかぶせる平和―は、ごまかしと恥の平和であつて、こういう平和は、結局は戦争か隷

従かに終るほかないのであります。

わたくしは、日本人が新しい憲法の制定に当つてこの問題に直面したときのことを、まざまざと思い出します。日本人は、現実主義者であります。そして戦慄（りつ）すべき経験を通じて、大量殺人のものすごい結果を知つている唯一の国民であります。二つの大きなイデオロギーの間にはさまつた一種の国境無人地帯のような運命を負わされている限定された地域のうちにあつて、日本人は、もう一度戦争に参加することは、勝つにしても負けるにしても、おそらく、かれらの民族の滅亡を招くであろうということを、実感として知つているのです。そこで日本の賢明な幣原老首相がわたくしのところに来られて、日本人自身を救うには、日本人は、国際的手段としての戦争を放棄すべきであるということを強く主張されました。わたくしが賛成すると、首相は、わたくしに向つて「世界はわれわれを嘲笑し、非現実的な空想家であるといつて、ばかにすることでしようけれども、今から百年

5713

国立公文書館
National Archives of Japan

後には、われわれは予言者とよばれるに至るでありましょう」と言われました。

世界は、生き延びようと考えるなら、おそかれ早かれ、この決断に到達しなければなりません。ただ一つの問は「いつ？」ということです。われわれは、もう一度戦わなければ、わからないのでありましょうか？　いつの日に権力の座にある大人物のうちのだれかが、この人類共通の望みーしかも急速に人類共通の必要事となつてきたこの望みーを実現するにに十分な想像力と道徳的な勇気とを持つに至るのでありましょうか、われらは新しい時代に生きております。古い方法と解決とでは、もはや不十分なのであります。われわれの敬慕する先祖たちが新しい世界に直面したときとまつたく同様に、われわれは、新しい考え、新しい様想、新しい概念を必要としているのです。われわれは古い殻を破つてそこから抜け出さなければならないのであります。いつの世にも、だれか指導者が必要ですが、われわれこそ、その指導

5714

者になるべきであります。われわれは、今こそ、世界の諸大国と申し合わせて戦争を放棄する用意があることを宣言すべきであります。その結果は、驚異的でありましょう。

（極東の事態に話題を転じる）

今申しあげました点は、極東における事態が緊迫していることに注目して考えると少々非現実的に響くかもわかりません。戦略上からいうならば、極東に現在存在している難問は、まつたく典型的な方式すなわち分散せる連合軍に対して中央に一大集結をしている敵という昔ながらの方式に沿つて発展してきています。中共ー先天的に、近代戦に要する工業生産高の点では弱いが、兵力の点では強い中共ーは、朝鮮戦線とインドシナ戦線と国府を敵とする国内戦線の三つの戦線で交戦しました。この三つの戦線で同時に戦うということは敗北を意味したでありましょうが、一つ一つの戦線で別々に戦えば、勝つチャンス

国立公文書館
National Archives of Japan

は十分にありました。勝利の期待は、いずれかの戦線で停戦を成立させて、限りある軍の全兵力を残りの一個または数個の戦線に投ずることができるかどうかにかかつていました。これが今までに起つていた事態であり、今も起つている事態であります。まず国内戦線の戦闘をやめることが、台湾地方を切り離すことによつて完成されましたが、これは、事実上は、国府軍という連合軍の一軍を移動不能にする結果になりました。中共は、ついで朝鮮とインドシナに全力を集中しました。しかしこの二つの戦線で戦うことすらも、限りある資源をもつてしては過重な仕事でありましたから、朝鮮では停戦が成立したのであります。これは、いわゆる国際連合軍と南鮮軍とを移動不能となし、中共が第三の戦線ーすなわちインドシナとフランス軍の戦線ーで全力を尽す自由を手離しで認めてやる結果となりました。

そこでうまくいつたので、中共は、今では台湾にある昔の第一の戦線に戻つてゆくのです。ナポレオン・ボナパルトが言つたように「連

合軍を敵としてわれに向かわせよ。一軍一軍各個撃破してみせん」です。

軍事的にいえば、このような状況は、集団安全保障の理論が元来虚弱なものであることを示しています。ー集団安全保障の鎖は、それを構成する最も弱い環より強いはずはなく、またこのことと以上に重要なことはー鎖の全力は、すべての環が同時に戦闘を開始した場合にしか活用できないということであります。連合軍内部の雑多な利害は、統一よりはむしろ分裂を導き出しがちであります。

何事が起ろうと極東の最終的運命はー軍事力によつて解決するのではありません。われわれは、実際にはーそしてまた世界の最終的運命ひとり残らず壊滅されてしまうことはありましょうーしかし戦争はもはや生存のための仲我人ではあり得ないのであります。

演説を終えるに当りまして、わたくしは、もう一度、この美しい都市ロスアンジエルスに対し、ご好意に満ちたご歓待を感謝申しあげな

国立公文書館
National Archives of Japan

いではすまされません。かつては宣教師が、われらのキリスト教文化の発展のために孤独な前哨兵として立つたこのロスアンジエルス、そして今やこのような大都会が、アメリカの産業と冒険の一つの記念碑としてここに立ちーカリフオルニヤの力強さの表現としてここに立つているーこのロスアンジエルスに来ることは、わたくしにとつて非常に感銘深いことであります。わたくしは、ここを去るにしのびないのであります。ーが、しかし、かつてわたくしが、今回とは非常に異なる状況のもとで誓いましたことがありましたように、わたくしは、再び戻つて参ることでございましよう。

5716

国立公文書館
National Archives of Japan